

かむ此てそ家つ邊に置く残か屋の垣根北邊附る菊の一本  
賤かやのまかきの菊の花もたゞ今日の盛をそへんとや唉く  
玄のかなめ浮世の外の賤家をひだりしめたる菊の花かな  
えつかやの垣根の菊もかをるなり君か惠の露のあまねく  
付ねかて誰れか見はば玄つか家の垣根を向ふ白菊の花  
人遠き庭に匂へる白菊やこの世の外の色は見えたる  
**麿男かすつるかき敵のちひひ鳥を色にかくせり白菊の花**

郭外冬眺(全)

託麻野のむらすみき場もかれて日影さひしき冬はきにけ  
飛鳥のねぐらにかゑる音鶯なむて眺さひ玄の夕くれ  
たゞに守るか焉玄の外に人もな玄山家も今や冬は知るらひ  
霜かれし杜の梢冰日暮落て鳥の音感ひ玄託麻野の原  
吹きすばみ諷に散行く木暮の葉の軒端にふかき冬の夕くれ  
木枯の風に草木もかれはてゝ人めまれなる冬の夕くれ  
木枯の吹きゆのらを來て見ればなへてふするの床とこを見れ

榮

孝

基

蘆寄

蘆

奇

鐵

蘆

基

破

孝

月紀

熊

州

月

紀

村

江

秋の野のをみゆへしにならひそよふすもなほくも風のまにく

松間紅葉

木枯のふくをまつまの夕紅葉散らぬ先よりを玄まれにけり  
 本番の御身草山居述懷<sup>御身の草山居の述懐</sup>に見ゆる事はいづれかの御身の事にあらず  
 めくちは此訪不以もかな落葉みく動爲法さひもさ山下の庵  
 生ひ起さむ柴の庵の青物みらぐる久渴な邊井山の理  
 大く此身を深山曉明<sup>此身を深山の曉明</sup>の人とまへ山を出でてゆきの處をうかがひ  
 かかえざきて夢魂結はぬ深山路の袖懸めすもか有明かの月  
 劲根路やさゆる霜夜に夢さめて有明かの月を見る哉

世路如夢

夢跡れやきのふの淵も今日の瀬どかれりにかはるけふの世の中  
 人誰も誰も紅葉如錦<sup>人誰も誰も紅葉の錦</sup>やるの世の中の長き時<sup>の長き時</sup>を度す  
 刹木乞ひ幾<sup>刹木乞ひ幾</sup>もか残る秋のみは紅葉の錦<sup>紅葉の錦</sup>をぬ時<sup>を</sup>なき  
 深くゆきの邊偏舟歸暮<sup>深くゆきの邊偏舟歸暮</sup>の事も叶ふ葉の秋の秋<sup>の秋</sup>を度す  
 多かず身を繰<sup>身を繰</sup>出て歸る蟹の海は身<sup>身</sup>もあはずや夕月の影  
 鏡底<sup>鏡底</sup>の身<sup>身</sup>菊花映水<sup>菊花映水</sup>と身<sup>身</sup>もあはずや夕月の影  
 水の面れ大和<sup>水の面れ大和</sup>に亥<sup>亥</sup>を識<sup>識</sup>なすを菊の花<sup>を菊の花</sup>と知らて見つゝも

孝	蘆	真	桃	江
孝	蘆	真	桃	江
孝	蘆	真	桃	江

詠家見月幾回圓

故郷を立てしより幾度か月の姿のまとかなる見る  
望月の影見る毎に思ふかな故郷出て幾日經にけむ  
月影も共に流れて秋の夜のなかめつきせぬ水の面が外な

不知秋思在誰家

夜もすがら誰れ秋風を身に玄めて衣打うちむ玉川の里  
誰家に砧うつらむさらてたにかなしきものを秋の夜なく  
きよ鶴鳴鶴鴻雁不堪愁裏聽良遲すやう喜びえむぞ  
さなきたに淋玄きものを雁の聲きくにえたへぬ獨寐の床  
山松の音にかよひて聞ゆなり月にすみゆく笛の一聲  
秋の夜の光く塗なき月の夜は笛の聲さへすみて聞ゆる  
かの馬山聲の笛聲さへすみゆく笛の聲

雜  
立秋歌

かの馬山聲の笛聲さへすみゆく笛の聲  
いたづらにふ舟ぬる身をは秋の夜の月にうつしてかこちぬる哉  
かの馬山聲の笛聲さへすみゆく笛の聲

基

紀

鐵

陽

芝

州

峯

州

桃

州

鐵

州

江

州

江

州